

2021（令和3）年5月19日

「日本語諸方言におけるラ行五段化が生じる条件の通方言的一般化とその理論的解釈」
発表者：宮岡 大（九州大学大学院博士後期課程 / 日本学術振興会特別研究員(DC)）

本発表では、日本語諸方言に広くみられる「ラ行五段化」現象の方言間バリエーションを記述し、通方言的に一般化した。加えて、その一般化が成立する動機を理論的に解釈した。

「ラ行五段化」とは、日本語諸方言において、動詞の母音語幹（i 語幹・i/u 語幹・e 語幹・e/u 語幹）が子音 r 語幹（ラ行五段語幹）と同じ形態論的振る舞いをしている現象である。表 1 の宮崎県椎葉村尾前方言（以下、尾前方言; 発表者データ）の動詞語形を例に説明する。

表 1. 宮崎県椎葉村尾前方言の動詞語形と基底表示（発表者データ）

		語幹	否定非過去	過去
子音語幹	r 語幹	togir- 「削る」	<i>togiran /togir-a-n/</i>	<i>togitta /togir-ta/</i>
母音語幹	i 語幹	mi(r)- 「見る」	<i>miran /mir-a-n/</i>	<i>mita /mi-ta/</i>
	e/u 語幹	hute- 「捨てる」	<i>huten /hute-n/</i>	<i>huteta /hute-ta/</i>

母音語幹のうち、いわゆる上一段語幹にあたる i 語幹「見る」の語形に着目すると、過去形 *mita* は、いわゆる下二段語幹の e/u 語幹「捨てる」と同様に、母音終わりの語幹/mi-/に過去接辞/-ta/ が後続する。一方、否定非過去形 *miran* については、e/u 語幹の場合と異なり、子音 r 終わりの語幹/mir-/に非実現の語幹母音/-a/ が後続した/mir-a/ に否定非過去接辞/-n/ が後続すると分析される。すなわち、過去形 *mita* では e/u 語幹「捨てる」と同じ振る舞いをし、否定非過去形 *miran* では子音 r 語幹「削る」と同じ振る舞いをする。ラ行五段化は、*miran* にみられる、母音語幹が子音 r 語幹と同様の形態論的振る舞いをしている現象を指す。

表 1 に示すように、尾前方言の母音語幹のうち、i 語幹ではラ行五段化が生じるが、e/u 語幹でラ行五段化は生じない。i 語幹でも、否定非過去形はラ行五段化が生じるが、過去形はラ行五段化が生じない。

本発表ではこのように、ラ行五段化に関与する動詞語幹と接辞には条件があり、それは方言ごとに異なることを示した。その上で、各方言においてラ行五段化に関与する動詞語幹と接辞の条件を通方言的に一般化した。一般化は、語幹末母音・語幹モーラ数・接辞の種類という 3 つの観点から、階層の形で示した。最後に、この階層が成立する理由を語形の使用頻度から説明した。階層は語形の使用頻度が低い順に並んでいることを、コーパスを用いた調査によって示した。